

(5) 閉会

6. 閉会

閉会挨拶

公益財団法人医学教育振興財団理事長 小川 秀興氏

北村先生、前田先生、大変御苦労さまでした。本日のワークショップ、非常に興味深く拝聴させていただきました。結論として極めて重要なことは、江藤先生と神津先生がおっしゃった如く、日本の世界の中での立ち位置を確認することです。日本は教育立国であり、学術立国であるということは昔から変わらない基本路線だと思います。学術、その中で医学と歯学をコアとして日本のステータスを世界に示していくということは、大変重要なことです。そういう意味で、医歯学の教育をリーディングしている先生方に集まってもらって、意見を交換する会、本会が国の主導について開催されております。今回はディスカッションではなくてワークショップで、テーマは、①医科系は「分野別認証評価における自己点検評価の進め方」、②歯科系は「卒後教育における到達目標の設定及び対応するカリキュラムや評価の在り方」であり、いずれも実務的であり、有意義であったと思います。

このワークショップには、80の医科大学、それから29の歯科大学から概ね1人ずつ参加されているのですが、不参加の大学がかなりあるということは極めて残念なことだと思います。このようなワークショップに参加して、日本の国の医学系の大学、歯学系の大学、そしてお互いの大学における教育のありよう、考え方を聞き、そして意見を述べ合い、どんなに変わっていくのが臆することなく意見を交換していくことは重要です。そしてここにおいて課題に関するコアの部分は固めながら自分たちの立ち位置も確かめるということは極めて大事なことと考えます。毎年夏、この最も暑い季節に、文部科学省の主催で医学・歯学教育指導者のためのイベントである本会をこれからも大切に考え、来年からは必ず各校から複数名参画して頂きたいと感じました。今日御参加の先生方は、その大学内で不参加の先生方に、このワークショップにおける論点を整理、説明して、その理解を促して頂きたいと思います。

それから、この文部科学省のワークショップとドッキングしまして、毎年、医学教育振興財団が全く同じこの教室を使わせていただきまして、医学教育の指導者、リーダー、モデレーター、オーガナイザーのためのフォーラムを前日開催しました。昨日は大変熱い議論が交わされました。モデレーターの福島先生あるいは、伴先生が極めて見事にフォーラムを運営されておりました。今回のテーマは企画委員の方々の意見を尊重して選出しまし

た「医学教育におけるパフォーマンス評価— パフォーマンス評価による学習の質の評価—」でした。今の医学教育・歯学教育の改革は、世界的にはイギリス、アメリカ主導であるかのごとく変わっていくポイントがあり、今回は大きく変わるであろうポイントが論じられました。そのポイントは、本日奈良先生が丁寧に説明されました。日本の医学界、歯学界は欧米の潮流を理解しつつ取り入れ、その上で日本はそれに加えるに、どういうところを強調していくかが論じられました。医学教育振興財団のフォーラムは、高久前理事長の御方針もあり、伝統的にスタンダードなルール作りが得意なイギリスの実情を捉えるべく実施しています。私が新しい財団の理事長になり、ヨーロッパの医学教育の主流を荷なっている、イギリスのリーズ大学からProf. Trudie Robertsとロンドン大学からProf. Jane Dacreの2人の女性プロフェッサーをコアスピーカーとしてお招きして本年度のフォーラムを実施しました。お二人は、似ているような意見も示しながら、壇上では火花を散らすような議論を交わす姿を見せて頂きました。ブリティッシュと一緒に固まるわけではなく、極めて面白い話が聞けたと思います。そして、この2人に対抗できる日本の女性の先生を探すと、鹿児島大学の田川先生、そして京都大学の松下先生がおり、日本の医学教育学会はすばらしい論者をそろえていると思いました。そしてリーズ大学からお招きしたProf. Trudie Robertsは、カロリンスカ大学で学んだサイエンティストであり、京都大学からおいでになった松下先生は教育学者であり、お二人ともに医学に特化した方々ではないところが新鮮でした。ブリティッシュの人たちが難しい教育論を、テクニカル・タームを用いつつ言うと、静かな口調だけれども見事な英語でたしなめて、なかなか日本人の女性もすごい人がいるなど、本当にいい思いをさせていただきました。そして、5人のスピーカーの中で1人だけ秋田からおいでになった長谷川先生が男性で、もう本当にすばらしいプレゼンテーションをして頂きました。日本も女性だけでなく男性もいるということ、我々を代表してやってくれたと思います。医学教育振興財団は欧米、ヨーロッパを参考として、イギリスの知識と経験を確かめつつ学んで、それに従うというのではなく、それとネゴシエートしていくという形でフォーラムを開催いたしました。ルール作りが大好きな欧米、守ることに熱心な日本が、歴史的にも全ての分野で起こっています。私はいつの日か、日本が医学教育法のルール作りのコアになって世界をリードしていきたいとの考えを持っています。

全国医学部長病院長会議会長の荒川先生は、開会の辞で、医学教育の会は専門用語が極めて多く、テクニカル・タームを覚えるのに労力を要する会であると認識していたが、5・

6年前から医学教育は枢要なものであるということを再認識し、全国医学部長病院長会議の会長として今後これを大いに推進していきたいと発言されていました。私も同じ思いを持ったことがあります。多分、神津先生などシニアの先生方は皆さん御存じだと思いますが、順天堂元理事長の懸田克躬先生は医学教育の重要性を早くから認識し、当時順天堂で一番若い助教授であった私に、これをずっと伝承しなさいと言っていました。その後も新しい専門用語も増えてきましたが、是非教務委員長の先生方はお持ち帰りになって、教務委員会のみならず、学内の協力者を増やし、学内での更なるディスカッションに繋げていただければ非常に良いと思います。また、今後はこのワークショップに各大学から複数の方が参加されることを期待したいと思います。

この会議は文部科学省主催ですが、会場からの質問やコメントに対する答えをお聞きしていて、文部科学省高等教育局医学教育課の仕事というのはとても大変だと感じました。たくさん出てくるQ&Aやリクエストにまで一生懸命考え、そして的確な答えを出しておられ、その対応に感心いたしました。医学も歯学もベースの倫理学といますか、心は、人のことを思いやる、人の立場になって考えることであります。もし私が文部科学省の課長や企画官だったら、怒ったかもしれないような質問を丁寧に对应されていたと思います。それから北村先生が、ちょっと質問を振ってこの場を和ませ、ディスカッションの流れをお二人の医学教育のシニア、そして歯学教育のシニアの方々に流され、そこから期せずして私の前に医学教育の会のエム・アンド・スコープがコメントされたと思います。この会の目的、そして最後の結論に近いことは袖山課長が総括されていますし、時々振られる質問に対して丁寧に对应されている平子企画官を見て、まさに日本というのはこういう国なのだということがよく分かるようなワークショップであったと思います。

どうも本当に皆さん、暑い中御苦労さまでございました。皆さんどうかいろいろなディスカッションを各大学に持ち帰って、そして伝え、普及して頂きたいと思います。

最後に、会場を提供していただきました栗原理事長始め、慈恵医大の方々に深く感謝申し上げます。どうもありがとうございました。